

生 活 科

興 井 綾 子

1 生活科の本質について

具体的な活動や体験を通して 自立への基礎を養うこと

遊びを生活の大半として、友達とかかわる楽しさを味わう幼稚園や保育所の時期を経て、小学校低学年では一人一人が自分なりの思いを表出しながら、集団で学び合う時期と言える。この時期に興味・関心を持って身近な人々、社会及び自然と主体的にかかわる具体的な活動や体験をすることによって、子ども達は学ぶことの楽しさや成就感を味わうことができる。楽しかったからこそ、次にこうしたいという新たな意欲を生み、より積極的に環境とかかわるようになっていく。その過程の中で、子ども達は自分自身や自分の生活を考えるようになってくる。この一連の活動を繰り返すことで自信がつき、自立への基礎を養うことができると期待している。ここでいう自立とは、次の3つを指している。1つ目は、学習活動を自ら進んで行うという学習上の自立。2つ目は、自らよりよい生活を創りだしていくことができるという生活上の自立。3つ目は、自分の良さに気付き自分の在り方について考えていく精神上的自立である。

この時期にいろいろな経験を積むことは、これからの人間形成の上で重要な部分を占めてくるであろう。しかし、人とかかわり方がうまくいかず、日常生活上でもトラブルが絶えない現状を踏まえて、今回の新指導要領でも重視されている「身近な人々」とのかかわりに、より目を向けて活動や体験を重ねていきたい。それにより、自ら考えて判断し、行動できる力がつき、「自立への基礎を養う」ことに迫ることができると考えた。

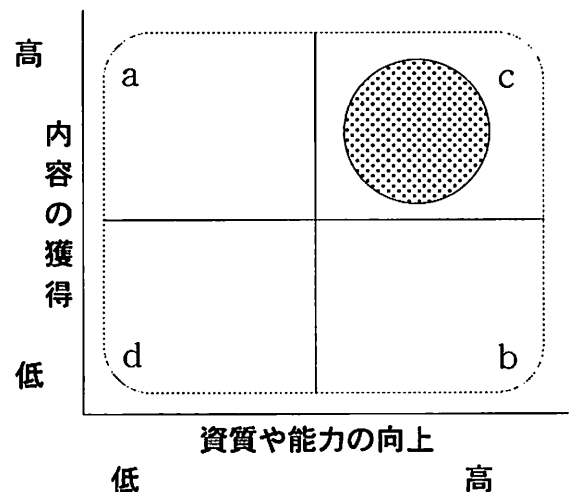
2 生活科の「学び」について

生活科における学びとは、具体的な活動や体験を通して、自分に合った方法で、自分で工夫してかわり方を創造していくことととらえている。

そして、生活科で扱う内容は「自分と人や社会とかかわり」「自分と自然とかかわり」「自分自身」の3つの視点から構成されているが、活動や体験そのものも内容ととらえている。

生活科では、内容＝資質・能力的なところがあるが、特に資質・能力として「自己肯定感（自分にもできた）」「学習方法の獲得」「コミュニケーション能力」などがあげられる。

生活科という教科を、学びの構造図に表すと、右の図のようになる。



3 本質に基づく基礎・基本について

自分なりの思いや願いの実現に向かって 身近な人々・社会及び自然とかかわり
自分なりの方法で解決すること
また その解決のために必要な習慣や技能を身につけること

身近な人々・社会及び自然とかかわりながら、具体的な活動や体験を通して身に付け、その後の生活や学習に生きて働くようになることが大切である。そして、自分なりの方法で問題を解決していくことが必要となってくる。その解決には、生活上必要な習慣や技能も身に付けていなければならない。これらができるためには、具体的な活動や体験を十分に行うことが大切であると考えて、上記のことを基礎・基本ととらえた。

4 単元を構想するにあたって

生活科の学びの場において、自立への基礎を養うことを目指すために、以下に述べる視点に基づいて単元を構想していく。

(1) 一人一人が身近な「人・社会・自然」に はたらきかけを促す

一人一人の発達段階や、何に興味を持っているのかなどについて、日頃から把握しておくことが必要である。一人一人が興味・関心を持ち、喜んで取り組んでいくことが起爆剤となって、意欲的に学習を進め持続させていけると考えている。

そのために、学習前の学習環境の整備を行ったり、子どもが「おや」「不思議だな」など驚きやつぶやきが出るような学習材の選択や出合わせ方の工夫をしていきたい。なお、年間を通して人とかかわりを大切にしながら、協調性や他への思いやりを深めていきたい。ここでいう人とは、学級・学年及び異学年の友達、幼稚園児、家族、英語活動の先生や外国の人、地域の人々などである。

(2) 知的な気づきを大切にする場を設ける

知的な気づきとは、児童が見付けた事物や現象についての直感的な特徴付けやアイデア比較や関係付けを行って得られた考えを、自らの理論として、それぞれの児童が進んで言い表わすところのものを知的な気づきととらえている。それらは、将来における科学的な思考や認識、合理的な判断、そして美的、道徳的な判断の基礎となるものとも言える。

そのためには、実際にそのものに触れたり食べたり、においを嗅いだり聞いたりなど、諸感覚を通した実体験を取り入れていきたい。そして、子どもの発言やしぐさに見る情緒的なかわりを重視し、子どもの感じ取った内容を教師から問い掛けたり、子どもの思いに共感したりしていきたい。思いや気づきを肯定したり認めたりすることにより、安心感を持ったり、互いに何でも教え合ったり、また何でも見付けてみようという意欲につながり、次の学びへの基礎になっていくと考えている。

(3) 自分や友達の考えを聞いたり広めたりする場を設ける

同じグループや一人一人が友達とかかわり合いながら活動したり、一人一人の思いを伝え合ったりすることによって、それぞれにとっての学びの場としたい。体験したことを友達に話すことで、自分と同じ考えであることに気づき、安心感を抱いたり、自分との違いに気づき、その違いを認めて間接体験をしたりもできる。そして、興味・関心を持ったり、自分の考えを深め・広めたり、次の活動意欲や新たな見通しを持ったりすることもできる。

そのためには、教師が意図的に共有化の場を設けたり、自己表出の方法を考えて、自分にあった方法で表現させたりしていきたい。これらの積み重ねで、他人から認められて自分に自信も付いていくと思われる。

(4) 振り返りの場を設ける

一人一人が活動を楽しむだけに終わらせるのではなく、楽しかったことを蓄積することで、知的好奇心に結びついた、省察力や次の活動意欲につなげることができると考えている。

そのために、活動で楽しかったことなどを文や絵などで振り返ったり、共通の場で思いを表出したり、追体験させたりしたい。そのために、振り返る時間を保証したり、自分の方法で自己表出ができるようにさせたい。この過程の中で自分を見つめ、以前とは異なった自分に気付いていくことを願っている。

5 実践例 — 1 年 —

(1) 単元名 大きくなあれ わたしの あさがおさん

- (2) 目 標
- ・植物を育てることに関心を持ち、進んで世話をしたり幼稚園児と仲良くかかわったりすることができる。
 - ・育っていく様子や成長へ願いや喜びを絵や文、動作化などで工夫して表現することができる。
 - ・植物の成長や変化、不思議さやおもしろさなどに気付くとともに、植物が成長するためには、いろいろな世話が必要であることに気付くことができる。

(3) 指導にあたって

本単元の基礎・基本について

1年生のこの時期、生命の素晴らしさ、美しさ、不思議さに気付く感性に驚かされることが多い。自分の手で育てるなどして、草花とかかわればかかわるほど友達のように接したり、自分自身が同化したりするなど、草花に心を寄せ、感性を豊かにしていく子どもが多い。しかし、最近の自然環境や社会環境の変化は、児童が普段の生活の中で植物と触れ合い、かかわり合う機会を乏しくさせている。そこで、栽培を通して直接触れ合うようにすることは、生き物への親しみを増し、かかわりを深めることになる。さらに、生き物を通して種を上級生からプレゼントされたり、育て方を聞いたりなど、人とかかわる場も数多くあり、人とのかかわりを深めることもできる。

子どもは、幼稚園や家庭でひまわりなどを植えた経験を持つ子が3分の1はいるが、自分で世話をしたというより、家族が育ててくれた場合がほとんどである。教室の花には、あまり関心が見られず、2年生からもらったチューリップの鉢も跨ぎ越すなど、いたわりの心が見られにくい。そして、友達とのかかわりも特定の子だけであり、かかわることを苦手としている子どもみられる。

よって、この単元における基礎・基本を次のように考えている。

・植物を育てる主体的なかかわり合を通して、身近な植物に興味・関心を持ち、それらが成長していることに気付く。

・植物を育てる活動を通して人とかかわることができる。

学びを深めるために

① 一人一人が身近な「人・社会・自然」に はたらきかけを促す

あさがおの種を環境委員会からプレゼントされたということで、種と出合わせたい。そのことにより、自分達の入学を喜んでくれている人が他にもいることに喜びを感じ、大切にして大きくきれいな花を咲かせたいなどの願いを持つであろう。

また、間引きをしたあさがおの苗をどうするか考えることにより、幼稚園とのかかわりのきっかけとしたい。世話の仕方などを幼稚園児に教えようという目的意識が生まれ、幼稚園児に分かる教え方や、思いやりをもったかかわりが見られるであろう。

単元計画 (総時数 17 時間)

| 主な活動と内容 | 学びを深めるために |
|-----------------------|------------------|
| 1 あさがおの種と出合う _____ | 環境委員会 ① |
| 大きくてきれいなあさがおを育てよう | ・種のプレゼント |
| 2 あさがおを育てる | ①②③ |
| ・種まき | |
| ・本葉→間引きをしよう | |
| 友達・幼稚園・家族にプレゼント _____ | 幼稚園との交流 |
| ・支柱を立てる | ・聞く ・苗のプレゼント |
| ・追肥 _____ | ・追肥の話 ・苗の様子を見に行く |
| ・花が咲く | |
| 3 育ったあさがおで遊ぶ | ① |
| ・色水遊び・たたき染・押し花 | |
| ・幼稚園の子にも教えてあげよう _____ | ・一緒に遊ぶ ① |
| 4 できた種をプレゼントする | |
| ・新1年生・家族・栽培委員会 | |
| 5 あさがおの成長を振り返る | ①④ |

② 知的な気付き大切にするを場を設ける

あさがおの世話をしているうちに、「こんどの葉っぱは、双葉の時と形や手触りが違うよ」などの成長や変化に関する気付きをを大切にしながら取り上げていきたい。それによって、また次の違いを見つけようという意欲につながったり、植物への親しみが増したりしていくであろう。自分の生活を楽しみ、ものを見る目も育っていくと考えている。

③ 自分や友達の考えを聞いたり広めたりする場を設ける

あさがおを育てていて、困ったことなどを発表し合うことで、クラス全体の問題として解決方法を話し合っていきたい。

また、幼稚園が育てているあさがおのビデオレターを見ることで、幼稚園児の思いと小学生の思いを共有化し、「幼稚園に教えにいこう」という意欲につなげたい。

④ 振り返りの場を設ける

成長の記録をかく時間を保障したり、「うれしかったこと」などを話し合う場を設けたりすることで、世話の仕方がわかり、世話ができるようになった自分に気付くであろう。そこから、「もっと大きくしたい」「たくさん花を咲かせたい」「自分も〇〇ちゃんみたいにやってみよう」などの次の課題や、「別の植物を植えてみたい」などの発展につながると考えている。

(4)本単元における授業の実際と考察

A児は、握手大作戦の単元で、自分から友達に「握手して下さい」となかなか言えなかったり友達が「握手して下さい」と言うと逃げて行ってしまいうなど、友達とのかかわりを苦手としていた子どもである。教師に話し掛けたり教師の側から離れなかったりと、教師や大人とはかかわりを持てるのに、同じ世代の子とのかかわりが苦手であった。このままいくと、周りの児童もA児とかかわることを止めてしまうのではないかと、A児にも人とのかかわる楽しさを感じさせたいという思いから、A児を中心に周りの子どもらのかかわり方を育てたいと考え、A児を抽出児とした。

実践を行う上で、次の3つのことを考えた。第1に、A児は人とかかわりは苦手ではあるが、植物とはうまくかかわり世話ができるのだろうか。第2に、他の子どもとかかわりを、どの場でどのように行っていけば良いのか、第3に、A児の心の寄り所である幼稚園の先生と協力して実践していくことができる、幼稚園との交流を入れることで、A児が生き生きと活動する姿が見られるのではないかと考え、幼稚園との連携を進めることにした。

① A児の授業の実際

ア 一人一鉢のあさがお

A児は、自分のあさがおということで、こまめに水をやり、じっくりと観察をしていた。あさがおが大きくなるために「大きくなってね」と声掛けをしたり、周りのあさがおと比べたり、あさがおについて女の子と仲良く会話をする姿も見られた。

一人一鉢のあさがおを育てていたため、成長の様子を気にしながら、より大きくいっぱい花を咲かせたいという共通の思いから、周りの子と共通の話題が生まれ、どうしたら良いのか聞きたいという思いになり、かかわりが生まれたと思われる。

イ 移植したあさがおを幼稚園にあげる

幼稚園が気になるからということで、自分の移植したあさがおをA児はあげることにした。7つの鉢を誰が持って行くかという時、自分が持って行きたいと立候補してきた。幼稚園がA児にとって身近であり、幼稚園児や幼稚園の先生に認められたいという思いがあったからであろう。

友達と幼稚園で話すことの練習をしたり、他の子が「一緒に行こうね」と誘ってくれたり、その誘いを喜び飛んで行く姿が見られた。幼稚園児の前でもニコニコ顔で話をしていた。幼稚園の先生も上手に言えたねと、成長を褒めて下さった。A児と同じ幼稚園に持って行くという共通の目的意識と、話す言葉を分担したことが、他の児童にA児とかかわりを促したと思われる。



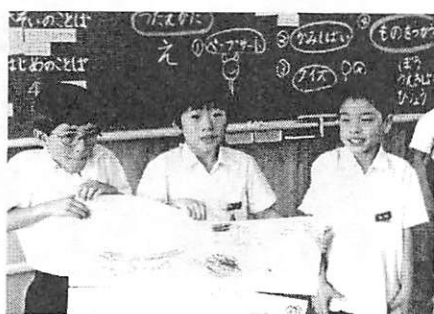
ウ 幼稚園からのビデオレター

たまたまA児があげたあさがおが大きくなり、どのように世話をしたらよいかわからないから教えてというビデオレターが、幼稚園から届いた。A児は、自分のあさがおが話題になっていることに、目をキラキラさせ、とても嬉しそうで、幼稚園児の世話の仕方にハラハラドキドキの表情を見せていた。A児と同じ思いにクラス全体がなり、「だめー」「あーあ」「このままじゃあさがおがだめになる」とビデオに向かって子ども達は訴えていた。そして、あさがおがだめになるから幼稚園に教えに行こうという思いになっていった。

ビデオレターから流れてくる、4歳児の予想も付かない世話の仕方が、A児やクラス全体の心を揺さ振りクラス全体の気持ちを「僕らが教えに行こう」という思いにさせたと思われる。同じ敷地内にあり近くですぐに行くことができることや、自分の卒園したところでもあり兄弟も通っているなどのことも、児童を動かしたと思われる。

エ 幼稚園に教える工夫

幼稚園に教えに行くことに、A児もクラス全員が乗り気で、全員で教えに行くことに決まった。しかし、「言葉だけでは幼稚園児は分からないから、絵などを使って分かりやすく教えて



絵で発表するグループ

ね」という幼稚園の先生の言葉に、「ビデオがいい」とA児は言った。クラスの友達も賛成してくれて嬉しそうだったが、撮影時間がかかることや、直接幼稚園児とかかわらせたかったので、今回はビデオは諦めてもらうことにした。しかし、他に伝える方法が浮かばないので、教師の方からペープサート・紙芝居・絵を描く・クイズ・実際にやってみるなどの表現方法を教えた。A児は、同じことを教えたい友達とグループを作り、グループで相談して絵を描いて発表することにした。グループの友達と言う練習をしており、その場からいなくなったり、友達の言葉を無視したりすることはなかった。

同じグループの友達も、よくA児に言葉を掛けており、自然な姿が見られた。何度も練習するうちに、少しずつ自信がついてきたようである。

A児は、仲のいい友達と同じグループになれたことで、安心感とやる気を生まれたと思われる。グループでの話し方も前に幼稚園でやった方法を生かして、分担してやったことが責任感とチームワークを生んだと考えられる。他の児童にとっても、新しい表現方法を知った喜びと自分達が選んだ方法で幼稚園児を喜ばせたい、分からせたいという思いが、今までにない程のやる気と友達同士のコミュニケーションや協力を生んだ考えられる。

オ 幼稚園児とあさがおで遊ぼう

1年生がランチルームであさがおで遊んでいるところへ、幼稚園児が1年生の育てているあさがおを見に来て、一緒に活動するというものである。

A児は自分なりに色水遊びをしており、教師に頼らず一人でやろうという意欲が出てきた。1年生が活動を十分に体験していない時点での幼稚園の登場だったので、全体的に幼稚園児に教えてあげようという意識は低かった。A児は幼稚園児に教えたり世話をするという姿は見られなかったものの、集団の人数が増えても自分なりの思いを持って、あさがおとのかかわりを持とうとする姿が見られた。

以前なら、教師の側から離れられなかったのに、今回は自分なりに活動できたのは、色水遊びがしたいという思いと、活動しているうちに「どうして緑色が黄色に変化したのか」という疑問が生まれ、自分なりに解決してみようとしていたからと分かった。

② 考察

A児は最初花は臭くて嫌だと言っていたが、あさがおの成長を喜び、水をやりたり声掛けをしたりと、植物とかかわりがもてることが分かった。しかも、活動が進むにつれて、絵のみの表現から自分の思いを文で書けるまでに変化し、あさがおに対する思い入れも深まってきたことも分かった。

そして、あさがおという素材と幼稚園との交流を持つことで、A児は同じクラスの子どもとか

かわりを持てるようになり、幼稚園児にも教えてあげたいという優しさも見られるようになった。この単位を通して、だんだん積極的な面が見られるようになり、かかわり方も苦痛さが減少してきている気がした。また、A児にかかわっていこうとする周りの子どもの姿やA児を認める姿も見られるようになった。単位の中で、グループで活動しなければならない場を設けたり、一人一鉢のように共通のものを育てて話題の共有化をすることが有効であると分かった。

なお、今後も、A児が他の子とかかわり合う姿を見ていくと共に、周りの子ども達とのかかわり方の変化も見ていきたい。

③ この単位を振り返って

ア あさがおという素材について

あさがおという素材は、子ども達にとって成長の変化顕著にとらえられ、知的好奇心を抱くことのできる素材であり、この時期の子ども達の育ちにふさわしいものである。魅力があるからこそあさがおのつるを上へもっと伸ばしたいという願いが出た時に、友達同士で支柱を継ぎ足す姿や、自然と協力しアイデアを出し合い工夫する場が見られ、かかわり合いを育てるにも良い素材であると分かった。あさがおの成長とともに、あさがおに同化する姿や一喜一憂する姿がとてもかわいらしかった。

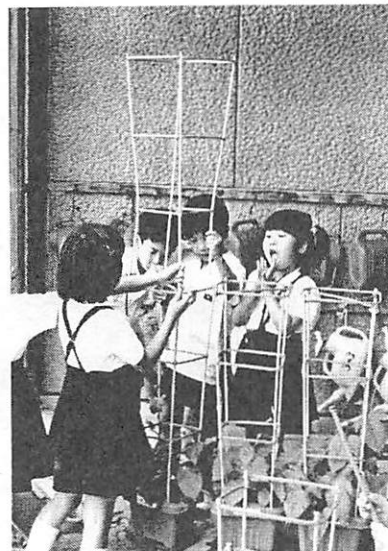
イ 幼稚園との交流について

1年生としては、年度当初3学期に年長さんを迎える会を、幼稚園児とのかかわりの場として考えていた。しかし、今年度の児童の実態を踏まえて、4歳児の幼稚園児とかかわるという展開をとることにした。少し年の離れた4歳児と交流を持ったことで、1年生がやる気を起こし目的意識を持ち、活動意欲を持続することができた。1年生なりに、小さい子をいたわり、「かわいいな」「もっと一緒に何かしたいな」という優しさが見られたことは、今後小さい子とかかわる際の基礎となるであろう。

幼稚園の先生と一緒に指導案を検討したり、事前の打ち合わせをおこなったりした。しかし幼稚園からビデオレターをもらったのに、1年生3クラスの時間調整に時間がかかった上に、雨が急に降り続き、あさがおが成長してしまい、タイムリーに幼稚園の疑問に答えられなくなってしまった。時間を弾力的に使って、すぐに答えられるようにすべきであった。そして、できれば幼稚園児に一人一鉢上げた方が、ぼくの・わたしのあさがおという意識になって、植物に愛着も持てたであろう。

また、幼稚園児にとっても、幼稚園でしたサインペンでの色水遊びを発展させる機会になり、一度にいろんな活動を楽しめる場となった。小学生と一緒な場での幼稚園児の姿にも積極強的に活動する子、逆に先生から離れられない子などの園児の姿が見受けられた。小学校に入っても、集団の中でうまく適応できるかもしれないという見通しや、今後の園児に対する支援の方向も見えてきたと思われる。小学生も幼稚園児も集団に入れなかった子は、知識的にはよく知っているが、活動となると躊躇してしまう傾向があることが見えてきた。今回、体験すること自体の大切さを感じ、体験そのものを楽しめる子、体験を通して自分学びをしようとする子を目指して支援を行っていく必要性を感じた。

なお、幼稚園との交流については、その年の児童の実態を把握しながら、共に学び合う場を生活科の場で設けていきたい。ただし、低学年だけでなく他の学年との交流も行われると、より発達段階に応じたかかわり方ができ、小学校と幼稚園双方にとってより有益な場となるであろう。



友達と協力して支柱を伸ばしているところ



子どもの観察日記より